金石範

故国行

金石動

故圖行

国立工业学院图书馆
藏书

岩波書店

金 石 範（キム ソクポム）

1925年10月大阪生まれ．京大美学科卒．在日朝鮮人団体の専従として働いたのち，1948年4月の済州島民の反米軍・反李承晩の武装蜂起と，8万以上を殺戮した凄惨な弾圧を描いた「鴉の死」(1967)でデビュー．そのテーマは約4500枚を費した「火山島」(全3巻＝1983，文藝春秋）に引き継がれ，なお同第2部として書き継がれている．

故国行

一九九〇年八月二七日　第一刷発行©

定価二二〇〇円
（本体二一三六円）

著者　金石範（キム ソク ボム）

発行者　安江良介

発行所　株式会社　岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
電話 〇三-二六五-四一一一

印刷・凸版印刷　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-000826-9

目　次

Ⅰ　3
故国行　141
Ⅱ　158
光州虐殺に思う　165
済州島に思う　171
変わっていないこと　176
ふるさと済州島近海を飛ぶ　178
「鴉の死」と『火山島』　182
済州島と私
「六月革命」の火は消えない

「済州島事件」四十周年 188
済州島四・三事件、画期的な四十周年 192
禁書・『火山島』 195
禁書、その後 199
なぜ「四・三事件」にこだわるのか 204
見えざる力が書かす集大成としての長編 217
せめて板門店の道一本を 220
あとがき 223

装丁＝田村義也

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

故国行

一

この(一九八九年)正月に私たち友人、知人が招かれたある個人宅で〝新年会〟の寄り合いがあった。友人、知人というのは朝鮮総連の組織に関係しているか関係のあった人たちであって、文学をやっている人の集まりではない。それぞれ年輩の、六十歳前後の、あるいは七十歳に垂んとする私たち七、八人は、ご馳走をまえにして互いに杯を交した。そして夜遅くまでかなり飲んだ。私たち朝鮮人の酒席では昔から付きものだとはいうものの、いつの間にか正月早々から政治の話、「北」の共和国や朝鮮総連のこと、韓国の民主化について、南北朝鮮の統一の問題などへと話が進むうちに、私をふくめて鬱屈した気持の「北」の体制、その現状に対する批判が出たり、それへの反論も出たり、またほとんど何も語らぬ人もいたが、どれも分断祖国の現状に思いを寄せてのことだった。しかしそれはそれであって、美酒に酔いながらの私たちの酒席は、ともかく愉快になごやかに弾んだ。

ところで、その席には年長の友人であるK氏が坐っていたが、私たちは彼から韓国にいる母親が亡くなったという話を聞いた。まだ存命中だと思っていたのに、昨年末たまたま韓国から来た人を介しての弟の手紙などで、その事実を知ったという。しかもその母の死はすでに五年半前のことであって、彼はそれまで何も知らなかったのだった。

P市で高校教員をしているという弟とは、戦前のほんの少年時代に別れたきりだから、何十年も会っていないことになる。その弟が老母の面倒を兄に替って見てきたようだった。

K氏は戦前に日本へ留学後、治安維持法違反で巣鴨拘置所に未決拘禁中のところ、日本の敗戦を迎えて出所。その後ずっとこれまで一貫して組織の仕事に携ってきたのだが、いわば冷飯食いの〝一徹居士〟で、〝うだつの上がらない〟存在の、私の尊敬する年長の友人である。いまだに「北」へも、そして「南」へも行かず、老母の死去も五年余りのあいだ知らぬままに今日に至った。戦前の故郷を離れて、日本での生活が五十年になる。

K氏の母は享年数えで八十六歳、弟からの手紙で知った命日は陰暦の五月××日だという。私たちは今年のその母親の命日に、それはあとで調べてみると陽暦の六月××日だったが、その日には友人たちが集まって、せめてもの祭祀(チェサ)(法事)をしようということになった。本式の祭祀はP市在住の弟がしているにしても、長男としてそれをそのまま過ごすわけにはいかない。K氏は稀代の親不孝者ということになるだろう。本人のことばだが、朝鮮では警察に追われている人間でも、親の死に際しては

姿を現すというのに、自分はそれを果せなかった……。

彼のような立場にいる人は、例えば「北」と「南」とにそれぞれ親子兄弟など別れ別れになっている者――南北離散家族は一千万であり、決して彼だけではないし、彼自身諦念から至極淡々としていたが、それにしても私は遣り切れない気持がした。それには私がその一カ月余りまえ、四十二年ぶりに韓国へ行ってきたばかりだったこともあった。私は昨年十一月初めに日本を発って、それから二十二日間故国に滞在したのである。

私は韓国へ向かう直前に会ったK氏に、もしよければお母さんのいらっしゃるP市へ立ち寄って、弟さんを訪ねてこようかといったところが、彼は首を横に振った。もともと韓国政府の「忌避人物」である私が訪ねて行くことは、却って弟に迷惑を及ぼすだろうということだった。そうだろう。それはそうなのだ。その弟自身が、私の突然の訪問を迷惑がることだろう。迷惑どころではない。当惑し、恐怖するかも知れない。私は自分が「忌避人物」だとしても、韓国政府が正式に入国許可をしているのだから……と、つい安易に考えていたのだった。こんどの韓国訪問で、私はふるさとの済州島に十日ほど滞在したが、私の親戚のなかには、事情があってそうなのだったが、私と会うのを恐れ避けた者もいた。私のような者は相手のほうから接してくる場合はともかくとして、まだまだこちらから進んで会ったり、訪ねたりすることはしないほうがいい。こんどの韓国訪問にしても、韓国政府の招聘を受けての入国ならそれは別であって、またその場合は私は何十年ぶりに会うことになる親戚たちを

もよろこばせただろう。しかしいずれにしても、私が小説を書く立場とはいいながら、訪韓ができたのは恵まれてのことであるのは間違いない。

私は『文藝春秋』(一九八九年五月号)にこのたびの韓国訪問について(それは故国への旅であり、韓国の新聞や雑誌が書き、そして人々がいったように帰国であり、帰郷でもあった。それにしては何とうたかたのような二十二日間の帰国、帰郷であることか)、断章風のものを書いているが、これまでの四十余年間その帰国を果せなかったのは、一言でいって南北分断下の政治的な理由によるものだった。私はもともと「北」系の朝鮮総連(在日朝鮮人総連合会)関係で仕事をして来たが(「南」系には在日本韓国居留民団がある)、その組織を一九六八年に出てからも、朴正熙独裁政権である韓国政府に対する私の立場は変わらなかった。勿論、このような事情は私だけのものではない。当時はまた韓国へ行くにしても、反共が国是の向こうの政府が、何か余程のことでもない限り受け入れなかった。それが七十年代に入って変わってくる。つまりそれまでの政策を変えて、朝鮮総連組織に対する切り崩しの包摂工作をやりはじめた。組織のメンバーをいろいろなルートで韓国へ招き、とくにいわゆる文化人に対しては〝文化攻勢〟の一環として「故国訪問」の工作が積極的に行なわれた。一方では総連系の同胞に対して、何十年も帰っていない故郷での墓参り、「墓参団」の形で、〝帰郷〟の道を開いたりしたが、それは政策的に大きな成果を収め、折からの朝鮮総連離れの風潮にかなりの拍車をかけたといえよう。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

そして、こうした流れの上でしばらく経ってからであるが、一九八一年春の『季刊三千里』編集委員たちの訪韓が行なわれた。光州事件があったその翌年である。私はこの機会に私も同じ編集委員だった彼らの訪韓のことについて記しておきたい。

「……今年三月下旬、『季刊三千里』編集委員の金達寿、姜在彦、李進熙、そして社主の徐彩源氏らが韓国を訪問したことは、新聞などに広く書かれているので、知らない人は余りいないだろうと思う。私は『季刊三千里』編集委員たちの訪韓については、同じ編集委員として意見を異にしていたので、彼らが日本へ帰ってきた三月末に辞意を表明して『季刊三千里』を離れた。それからすでに半年以上がたつ。

私が『季刊三千里』編集委員を辞めた事実を自ら活字にして表明するのは、この「あとがき」が最初になる。しかし、なぜ辞めたのかは、ここで詳しく述べる余裕もないのだが、またその場所でもないだろう。いずれにしても、そのことについては書かねばならないと思っている……」

これは一九八一年末に出た拙著『「在日」の思想』(筑摩書房)の「あとがき」で述べたもので、日付はその年の十月二十五日となっている。それから八年が経った。当時のことを書くにしては、かなり長い時間がかかったことになるのだが、私も韓国へ行ってきたことでもあるし、この機会にそれを果したいと思う。

先に私は朝鮮総連から出たと書いたが、『季刊三千里』はいわばその組織を出た者たちによる雑誌

である。創刊に至る経緯は省略し、その後をおおまかに記すことにするが、一九七五年二月創刊号が当時獄中にあった韓国の詩人金芝河特集であるように、韓国の軍事独裁に対する民主化のたたかいに言論をもって与し、また総連組織の硬直した官僚主義に対する批判が私たちの基本的な姿勢だった。そして朝鮮と日本との「相互間の理解と連帯とをはかる」架橋の役割を担う、小さいながら文化綜合誌を目指して発行が続けられた。

総連組織と『三千里』の対立はまことにきびしく、総連中央朝鮮語機関紙『朝鮮新報』(日刊)、日本語機関紙『朝鮮時報』(週二回刊)その他『統一評論』などの日本語月刊雑誌で総力をあげての『三千里』に対する批判、攻撃は罵詈雑言渦巻く凄まじいものであり、なかでも私がその集中砲火の矢面に立っていた。それには個人的にはほとんど私が総連に対する批判、反論を書いていたことによるものだが、そのような状況のなかで雑誌作りが進められていた。

七七年八月に私が朝日新聞(八月十日)に「在日の虚構」を書いた直後、総連韓徳銖議長の指示で、ある人を介して私に『三千里』と〝休戦〟しようと提起してきたこともあった。私は編集委員たちに報告、討議の結果、『三千里』としてはまず予備交渉の形でそれに応じ、総連側は故許南麒氏、『三千里』側は李進熙氏の二人が新宿の朝鮮料理店で会って、話し合いをした。その後双方の会談参加のメンバーや範囲のことで話が食い違い、本交渉に至らずに流れた経緯があったが、聞くところによると「北」当局が妥協策を講ずるように総連組織に対して指示を与えたようだ。しかしそれとは別に、結

果的に私がさとったのは、あの私にとっては〝血みどろ〟といってもいい身辺に危険を感ずるような四面楚歌の状況のなかで、ほんとうにたたかう意思をすでに編集委員たちは持っていなかったことである。

「在日朝鮮人によって編集・刊行されている季刊雑誌『三千里』も創刊以来五年をかぞえ、このたびめでたく二〇号を発行した。金達寿、金石範のような在日朝鮮人作家、李進熙、姜在彦、朴慶植など歴史学者、その他有名無名の在日朝鮮人にまじって、多くの日本人も誌面に執筆者として登場するこの雑誌は、創刊のことばにもある通り「朝鮮と日本との間の複雑によじれた糸を解きほぐし、相互間の理解と連帯とをはかるための一つの橋」としての役割をみごとに果している。

ところがこの二〇号を読んでびっくりした。金石範の『「民族虚無主義の所産」について』という論文や金達寿ら編集委員たちの座談会『総連・韓徳銖議長に問う』を読んではじめて知ったのだが、在日朝鮮人総連合会(総連)では、この『三千里』を「反動的出版物」「反動的謀略雑誌」ときめつけ、在日朝鮮文学芸術家同盟では「三千里のペゴリ(やからども)の本質は民族虚無主義である。愛国運動に百害あって一利なし」と批判しているそうである。

金達寿の『備忘録』(『文芸』八月号)と金石範の『往生異聞』(『昴(すばる)』八月号)という在日朝鮮人組織のマイナス面を、在日朝鮮人の民衆像とともに鋭く描き出した小説にたいして、総連系の批評家が「民族虚無主義の所産」と攻撃したことは、すでに本欄(八月二十九日)でも取り上げら

れていたが、その根がこれほど深いものであるとは、筆者もうかつながら知らなかった。

日本人である筆者は、軽々しくこの論争に口をはさむつもりはないが、たとえば金芝河の救援などにかかわっている日本人は、同時に自分の国のなかでおこっているこういう問題を見すごしてはなるまい。政治と文学なんて古くさいよ、といっているそのおひざ元で、まさに政治と文学が死闘をくりかえしているのである。金芝河やソルジェニーツィンだけがたたかっているのではない(阿Q)」(東京新聞「大波小波」一九七九年十一月十四日)。

これは「大波小波」が十一月二十八日付とで三回、『三千里』の問題を扱っているうちの一つである。当時の一端を察することができるだろう。「売国の道へ行くのか、愛国の道へ行くのか……」。これは当時「北」の党幹部が私に向けたことばである。

編集委員会内部での韓国行きに関しては、親族の葬式に参加するとかその他のことで以前から話が出ていて、私はその場合は編集委員を辞めて個人で韓国へ行ってきてほしい、どうしてもとあれば、それは仕方のないことなのであって、私が編集委員を辞めることを表明もした。つまりこの時機に『三千里』編集委員の肩書きを持って韓国へ行くことは、たたかいの最中に敵にそっぽを向くようなものであって、私たちの立場を、『三千里』自体を潰す結果となる。総連も、そして韓国政府も各々別の思惑から『三千里』の骨抜きを望み、それをもたらすだろう韓国訪問を望んでいた。

八〇年五月、光州虐殺ののち、新しい全斗煥軍事独裁政権が日米の強力な支持のもとに出発したが、

前記編集委員たちの訪韓はこのような状況のなかで起こったのである。『三千里』内部での訪韓の話はそれまでも、軍事政権を批判する一方で総連と真っ向から対決しているたたかいの最中であるにもかかわらず繰返し頭をもたげたのであり、それに私は絶望的な気持を抱きながら、いつか事態がはっきりした形で、出てくることを予期していた。そして実際に、水面下で韓国訪問のため準備が進められていた。

光州事件から一年近く経った二月下旬のある日の夜、私は編集の同僚である金達寿氏から話があるというので、新宿の行きつけの居酒屋で会うことになった。

彼の話というのは、編集委員たちが韓国へ行くことになったので同行してほしいということであり、すでに一カ月ほどまえ広島在住の『三千里』社主徐彩源氏の自宅で、姜在彦や李進熙氏たちと相談して決まったのだと話して私を驚かせた。目的は光州事件で死刑宣告を受けている投獄中のいつ死刑執行されるかも知れない三人の政治犯たちの減刑釈放を請願するというものだった。

私は『季刊三千里』発行人で同じく編集委員である李哲氏はこのことを知っているのか、そして彼の意向はどうなのかと訊ねた。最終的な返答はまだだが考慮中だと金達寿氏は答えた。私は、結論から先に述べると同行するわけにはいかぬと断ったが、彼は困惑した腹立たしいばかりの表情をしていた。三人の死刑囚たちの死刑執行はおそらくあり得ない。レーガン新大統領の就任後最初の同盟国首脳として呼ばれた全斗煥訪米のあとであり、赦免、減刑措置で死刑執行はあり得ないのはすでに新聞

も予測していることで、子供でも分かること、それは滑稽だからやめなさいと私はいった。そして「太白山脈」の続編執筆の取材ということで、どこまでも個人的な立場で行くことをすすめた。

あなたが執筆取材のために個人的に行ってきても総連では、おそらく、韓国へ行ってきたということでさまざまな攻撃をするだろう。しかしそのときは、受けて立てばよい。もしそうなったら、私は徹底してあなたを擁護して、防波堤の役を果す。是非ともその道を取ってほしい、それは『三千里』のためにも、そして金達寿自身のためにもなるだろうとたのんだ。

彼は沈痛な表情だったが、しかしあくまで私に何とかいっしょに同行してほしいといった。是非、きみがいっしょでなければ困るんだ、困る……。バカなことをいわないで下さいよ。みなさんで決めたことはともかくとして、それに同行を求められても、困るのはこちらでしょう……。

私は彼の苦衷を知っていた。だから、真剣に私は彼が取材のためにでも韓国へ行ってきたあとに起こり得るだろう事態に対しては、身を挺して彼を守ろうと固く思っていたのである。

彼は「行くことができぬために気が狂いそうだ」と日頃話していたその韓国へ行く機会が何度かあったのに、それを逸してきていた。彼の韓国紀行である『故国まで』にも縷々と書かれているように、いろいろと悩んだあげくの選択だったといえる。かりに韓国へ行けぬ故にライフワークである「太白山脈」の続編が書けぬとなれば、そういうことが作家にあり得てはならぬのである。金達寿氏は年齢からしても先輩であり、そして解放後から大きな仕事をして来た在日朝鮮人作家の先達として敬意を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com